

透度や効果について評価し、活動に反映させていく。また、事業を継続していくためのスタッフの育成プログラムを実施した。今後はスタッフ育成プログラムのマニュアル化と、安定した活動を維持するための組織としての法人化も検討したいと考えている。

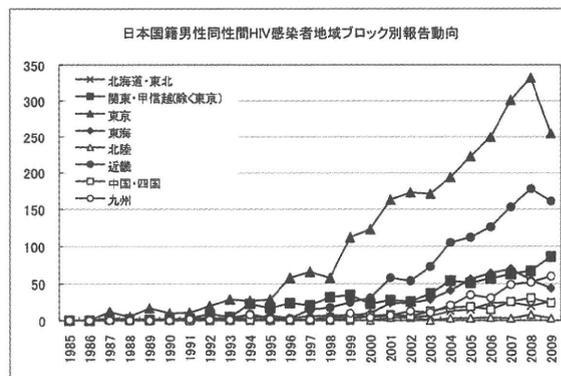
## A. 研究の背景と目的

厚生労働省エイズ発生动向における性的接触による HIV 感染者・AIDS 患者報告数はいまだ増加が続いており、男性同性間の性的接触による感染は6割以上に達している。地域ブロック別では、東京における感染が他ブロックを大きく上回り、特に新規 HIV 感染者の増加は著しい(グラフ 1、2)。また、市川ら、内海らによると、東京、大阪、名古屋地域で MSM (Men who have sex with men) の HIV 受検者における陽性率は2~3%であり、梅毒抗体陽性率も一般に比べ高いことは、MSM に向けた HIV を含む性感染症 (STI) に対する有効な予防対策が必要であることを示唆している。

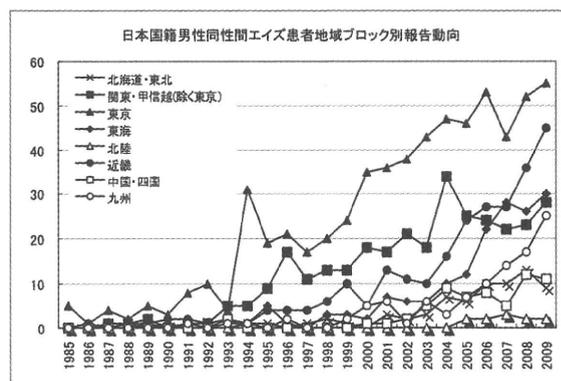
HIV/AIDS および他の STI が MSM の間で増加し続けている背景として、1) 今までの一般国民向けエイズ対策は MSM に訴求効果を示していない、2) これまでの MSM 向けの啓発資料開発や啓発普及が十分でない、3) 保健所等の無料 HIV 抗体検査・相談等の普及および受検者への性感染症予防介入が十分でないことなどがあげられる。日本国籍男性の同性間性的接触による HIV/AIDS 報告数が7割以上を占める東京(グラフ 3、4) およびその近県地域においては、MSM を対象とした HIV/STI 感染予防対策を推進するためには、訴求性のある啓発資料および実効的な普及方法の開発が急務である。

東京におけるゲイコミュニティとしては、新宿2丁目を中心とした商業施設(約300軒のゲイバー、ゲイショップ、クラブ、ハッテン場など)が集積している地域(以下新宿2丁目)が、日本最大規模の地域型コミュニティ

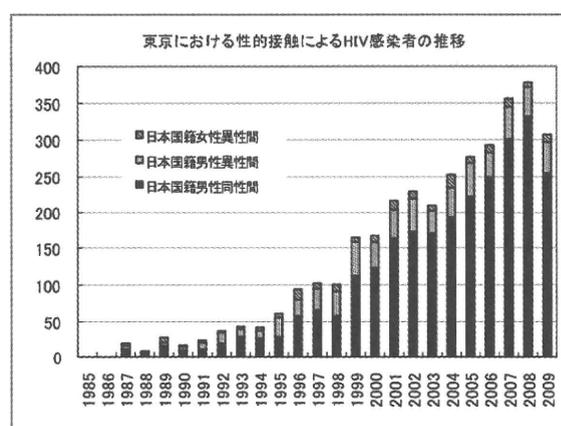
(グラフ 1)



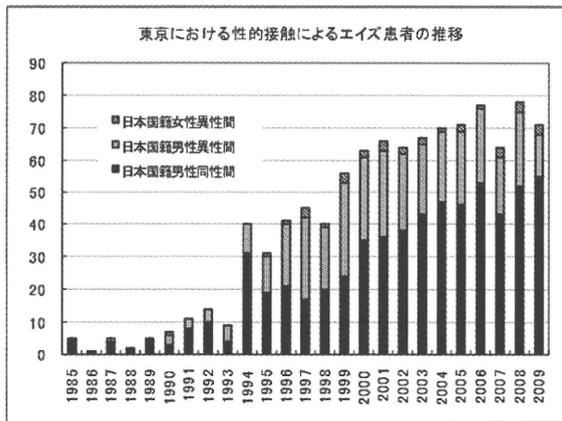
(グラフ 2)



(グラフ 3)



(グラフ 4)



として存在している。新宿2丁目はゲイ・バイセクシュアル男性が集まり交流する場としての歴史が古く、現在でも一日に数千人のゲイ・バイセクシュアル男性が出入りをしており、週末にはクラブイベントなども開催され、全国からアクセスがある。ただし近年では、新宿2丁目以外にも商業施設が存在するようになり、主に上野・浅草地域、新橋地域、渋谷地域に集積している傾向にある。また、都内には約90軒のハッテン場が存在しているが、それらは点在している。メディアとしては主なゲイ雑誌社が都内に存在しており、それらに対する効果的なアプローチは東京のみならず全国に波及する可能性がある。しかし一方でインターネットの普及により、地域型コミュニティやハッテン場やゲイ雑誌にアクセスせずにゲイ活動をする人も増加してきている。ひとそれぞれに活動の内容や関わり方、関わりの濃密さなどにおいて多様性があり、そしてゲイコミュニティの多様性は拡大しつつある。

HIV/AIDSやSTIに対する認識(知識や情報、予防行動、受検行動)は、以前から我々が行ってきた調査によると、一般の国民と比較すると高い傾向にあるものの、認識の低い層も高率に存在していた。特に若年層と高年層は認識が低い傾向にある。一方で性的活動が活発な20代~30代の感染が多い状況も続いている。

以上に示したような東京のコミュニティの多様性や、HIV/AIDSやSTIに対する認識の多様性を考慮しながら、効果的な予防啓発を推進するためのプログラムを実施する必要がある。

2002-2004年度(男性同性間でのHIV感染予防対策とその推進に関する研究)では、主に新宿2丁目を中心とする地域型ゲイコミュニティにアクセスするMSMを対象として、予防啓発をコミュニティベースで取り組むために、当事者参加によるプロジェクト「Rainbow Ring」を結成した。予防啓発活動の拠点としてコミュニティセンター「akta」を設立し、ハッテン場・バー・クラブイベントなどの商業施設へのアプローチを開始した。資料を作る上では、デザイナーや写真家・モデルなどのコミュニティ内のキーパーソンとの協力関係を構築した。また、行政・医療機関の情報をコミュニティに普及するために、東京都や新宿区などのエイズ担当部署や検査・医療機関との関係性を構築した。プロジェクトを進めるにあたっては、他のNPOとの協働のあり方も模索した。予防啓発のための基本的な体制づくりが着手され、その体制をベースとしたプログラムが施行された。

2005-2007年度(男性同性間でのHIV感染予防対策とその評価に関する研究)は、予防啓発体制を拡大・強化しつつ、それらを効果的に活用して、ゲイコミュニティに訴求性の高い啓発方法や啓発資料を開発した。特に継続的にアウトリーチを続けることや、啓発キャンペーンを大きく打ち出すことによって、予防啓発活動が可視化されるようになり、各商業施設との間にはネットワークが形成されてきた。また、HIVに対するリアリティや認識が低い層を意識して、「HIV陽性者との共生」を念頭に置いたプロジェクト「Living Together計画」を、ぷれいす東京と協働で展開した。

2006年より始まった「エイズ予防のための

戦略研究（首都圏 MSM グループ）」（以下「戦略研究」）では、対象を首都圏在住の MSM として、新宿 2 丁目以外の地域型コミュニティへのアプローチを徐々に試みている。また、音楽やスポーツなどのサークル活動へのアプローチや、WEB サイトを充実させるなど、より多様な MSM へのアプローチを試みている。HIV に関わる周辺問題（若者のセクシュアリティの受容や、薬物やセックス等の依存症など）も視野に入れた啓発資材を開発し、MSM に対して支援的な検査環境の整備も進めている。

当研究（2008–2010 年度）では、主に新宿 2 丁目を中心とした地域型コミュニティへの予防啓発を継続しつつ、今まで構築された体制を活用することによって、予防啓発のインターフェイスとして戦略研究と協力しながら、効果的な啓発モデルを提示することを目的とする。

## B. 研究方法

### 1. 研究体制

本研究をおこなうにあたり、地域ボランティア団体（CBO）として「Rainbow Ring」を結成し、研究協力体制の構築を図っている。Rainbow Ring は啓発資材開発およびその普及を行うが、スタッフ各自がもともと有しているネットワークを活用しつつ、既存のゲイ NGO、ゲイメディア、ゲイビジネス等の関係者から協力を得ながら、予防啓発のためのネットワークを構築している。

Rainbow Ring は予防啓発活動の拠点として、新宿 2 丁目内にコミュニティセンター「akta」を設立し、運営している。「akta」は（財）エイズ予防財団の委託事業として設立された。

また、本研究で試行する啓発資材、普及方法の有効性についての評価は研究者が担当し、さらに地域での MSM を対象とするエイズ施策の継続性のために東京および近県の行政との連携を図っている。

東京では、HIV/AIDS が問題となった当初からゲイ NGO が様々な活動を展開してきている。本研究は、今なお増加が続いている MSM における HIV 感染に対して、新たにその予防啓発の促進を目標として実施するものである。これまでの既存のゲイ NGO の成果を損ねることなく、Rainbow Ring を通じてこれらの NGO と協力連携しつつ予防対策のあり方を検討する。

### 2. 予防啓発計画

2010 年度は以下の活動および調査等を実施する。

1) コミュニティセンター「akta」および、「マンスリーakta」

啓発ネットワークの拠点としての運営と活動を継続する。また利用の拡大と情報の提供を充実させる。また、akta の広報と予防啓発情報の提供媒体を継続して作製、配布する。コミュニティ紙としての役割に加えて、予防啓発の情報を充実させる。

2) アウトリーチ

コンドームや啓発資材のアウトリーチのためのデリヘルプロジェクト（新宿 2 丁目の商業施設）および、啓発資材のアウトリーチのためのアダルトデリヘル（都内ハッテン場・ゲイポルノショップ）の活動を継続する。

3) スタッフ向け研修会（デリヘル勉強会）

Rainbow Ring の活動に関わるボランティアスタッフ（主にデリヘルボーイズ）を対象にした研修会を実施することにより、啓発活動をおこなう上でのスキルアップ・モチベーションアップを図る。

4) 講演会

HIV 感染にまつわる様々な情報を提供する講演会を開催する。

5) Living Together 計画

ふれいす東京と協働して、陽性者がすでに身の回りで生活しているというリアリティを普及させるためのイベント「Living Together Lounge」「Living Together のど自慢」を継続

して開催する。

#### 6) 医療・検査・行政との連携と情報提供

医療・行政との連携を継続し、検査等のサービスを周知させる。

#### 7) ホームページ

Rainbow Ring のホームページを再構築し、インターネット上での啓発および、活動の紹介を展開する。

#### 8) 研究成果発表会（活動報告会）

Rainbow Ring およびコミュニティセンター「akta」の活動を、コミュニティに向けて報告する会を毎年開催する。また、11月のエイズ学会学術総会でRainbow Ringの活動を紹介するためのブースを出展する。

#### 9) PRHYTHM

主にクラブイベント参加者をaktaに呼び込むためのイベントを開催する。

#### 10) NPO 法人化の模索

Rainbow Ring が継続して安定した活動ができるための体制を作るために、経験者や外郭団体などから情報を得ながら、負担なく実施できる方法を模索する。

### 3. 倫理面への配慮

男性同性愛者/両性愛者は、社会からの偏見・差別が強く、啓発活動を進める場合はこれらを配慮する必要がある。このため、本研究では、当事者と連携して調査、啓発等の内容を検討し、対象者を含めゲイコミュニティへの倫理的配慮を保ちつつ研究を進める。コンドーム啓発プログラムをゲイコミュニティに浸透させるためには、バー、クラブ、ハッテン場等の施設の協力が必須で、研究の主旨等を説明し、施設経営者等との相互理解、信頼関係を構築している。

## C. 研究結果

### 1. コミュニティセンター「akta」

コミュニティセンター「akta」は、MSM を対象としたコミュニティベースの予防啓発普

及の拠点を目的に 2003 年 8 月設立された。運営はエイズ予防財団の「男性同性間の HIV/STI 感染予防に関する啓発事業」を受託する形で Rainbow Ring がおこなっている。ゲイコミュニティに根ざした予防啓発活動をするために、また無関心層を呼び込むために、アクセスのしやすさを考えてゲイ商業施設等の集中している新宿 2 丁目に設立し、入りやすくくつろぎやすい雰囲気を第一義に考えている。また展示会やミーティング、講演会なども開催できるコミュニティスペースとして運営し、認知の向上と来場者の増加を図っている。事務局員が 1~2 名連日交代で勤務し、毎週月曜日、第 2 日曜日および年末年始を除き、毎日 16 時から 22 時まで開場している。

akta は以下の活動をおこなっている。

- ・ 情報提供の場（HIV/STI 啓発に関わる情報およびコミュニティ情報）
- ・ 啓発資材や啓発プログラムの開発
- ・ 資材配布の拠点（資材の作製・梱包・管理・配送・アウトリーチ等）
- ・ HIV/AIDS に関わる人たちの利用（ミーティングや研修など）
- ・ 学習の場（ワークショップや講演会など）
- ・ コミュニティスペース（ドロップインスペース、展示スペース、さまざまな打ち合わせやミーティング利用など）

#### 1) 来場者の動向

今年度のaktaへの1日平均来場者数の推移は下記のとおりであった。初来場者数は平均すると日に約6人で、昨年度に比べて増加傾向にあった（表1）。

#### 2) akta の利用状況

akta は様々なミーティングや講演会、展示会などに利用されている。今年度公開としておこなわれた展示会・講演会は、以下のとおりであった（2月以降は現時点では予定）。

- ・ Akira the Hustler 展覧会関連イベント（4/3）
- ・ タカヤナギアキラ展（4/13~25）
- ・ 転石風どこでも茶会（4/17）

- ・さいとうりょうた展 (4/27～5/8)
- ・RH展 (5/11～23)
- ・フォーラム「Making the AIDS Campaign～みんなでテーマを考えよう」(5/15)
- ・シバノジョシア写真展 (5/25～6/6)
- ・Pajamas vol.01 (6/5)
- ・ジャンジ♥のワークショップ「ハグハグ」(6/6)
- ・ボリューム展ミラン・ピエログルリッチ (7/13～25)
- ・PRHYTHM Vol. 34～キラリ☆夏ランド～ (7/17)
- ・展覧会/オペラグラフィカ“赤ずきんとオオカミ”～Little Red Food Who Loved The Wolf～ (8/10～22)
- ・AA セクシュアル・マイノリティ・オープン・メッセージ (8/29)
- ・Language Exchange (8/29)
- ・エイズはじめて物語 第6回「日本ではじめてエイズを診た医師～HIV 診療の過去とこれから」(9/23)
- ・エイズはじめて物語 第7回「垣根を越えるエイズ会議～コミュニティと研究のコラボレーションの歴史」(9/23)
- ・ビアン/バイセクシュアル女性のためのセーフセックスワークショップ (10/24)
- ・…TABOO 実験的無題～其ノ参・肆～ (10/26～11/7)
- ・Rainbow Ring & コミュニティセンター akta 活動報告会～ゲイコミュニティとのネットワーキング～ (11/23～12/5)
- ・珍魂画～猯 SOUL～artist:BAKU (12/14～26)
- ・IQG. Charity Frea Market (12/18)

- ・Pajamas vol.02[最☆終☆回] (1/17)
- ・写真展「フェチの肖像」その壺 レザーと土方 (2/22～27)

また定例的に、韓国語自主学習会、中国語教室、AA (アルコール依存症からの回復) セクシュアル・マイノリティ・ミーティング、竹輪句会、ゲイのためのライフプランニング研究会などに利用していただいている。

Rainbow Ring 以外のミーティングは、ほとんどが戦略研究のミーティングであり、戦略研究の活動の拠点・前線としても機能している (表 2)。

### 3) 相談

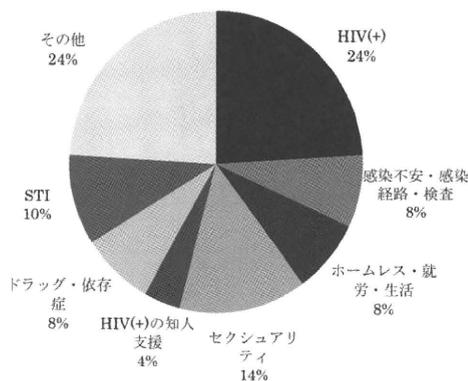
来場者から相談があった場合には原則的に、akta にある資材や相談機関を紹介している。感染不安などについては専門的なカウンセリングができないことを了解の上、傾聴するに留め、誤った知識については適正な情報を提供するように努めている。また、akta の特性上「オープンスペース」という環境での対応になることをご理解いただいている。紹介する資材については検査や病院、性感染症などの情報を充実させている。

今年度は、月に 3～13 件の相談があった (電話での相談も含む)。1 月までの相談の内訳は (グラフ 5) のとおりであった。これは一回の相談につき 1 つのテーマで分類しているため、内容が複数のテーマにわたる場合はその主なテーマを示している。昨年度よりセクシュアリティについての相談の割合が減少し、相談内容は多岐にわたっている。

(表 1: 1 日平均来場者数と月間初来場者数)

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月
今年度	31.0	31.2	36.7	32.8	38.9	30.5	29.4	32.0	29.9	26.4
昨年度	31.5	31.2	27.1	30.0	36.5	28.0	29.4	29.0	28.0	31.9
差	-0.5	0.0	9.6	2.8	2.4	1.5	0.0	3.1	1.9	-5.5
初来場者数	174	191	168	155	233	93	135	164	163	103

(グラフ 5 : 49 件の相談内容の内訳)



#### 4) 資材の梱包・管理・配送・アウトリーチ

首都圏の保健所等の検査機関や HIV 診療拠点病院、行政、各商業施設、Rainbow Ring の活動に関わっていただいている個人や団体などに、「マンスリーakta」をはじめ、イベントのフライヤーや、作製した啓発資材を梱包して配送している。毎月約 160 通の資材の配送をおこなっている。また、アウトリーチするための資材を梱包・準備している。

また、戦略研究とも協力して、戦略研究で作製した資材の管理や仕分け、配送やアウトリーチもおこなっている。今年度も「テニス大会」や「Gaysian Games」などのスポーツ大会、「Tokyo Pride Parade」や「レインボー祭り」で配布する資材の準備とアウトリーチを

おこなった。また「できる！キャンペーン」で四期にわたって作製された資材や、検査の情報資材のアウトリーチもおこなった。戦略研究で協力いただいている約 40 の保健所への

5) マンスリーakta  
akta より情報紙「マンスリーakta (akta monthly paper)」を毎月発行している。内容はaktaのスケジュールや催し物の情報に加え、コミュニティ情報、医療や検査情報、Rainbow Ring の予防啓発活動の紹介などである。作製にはRainbow Ring スタッフ以外のライターや写真家などにも継続的に関わっていただき、編集会議が定期的に行われている。記事の執筆や取材においては、コミュニティとの連携を念頭においている。表紙にはいろいろなタイプの顔写真を配し、様々なターゲット層に読まれるように配慮している。

「Topics!」では、HIV に関連した実用的かつ最新の情報を掲載している (4 月：年金－医療や療養生活のための制度－中級編、5 月：身体障害制度－医療や療養生活のための制度－上級編、6 月：A 型肝炎、7 月：沖縄の活動と mabui の紹介、8 月：ゲイツーリズムと性行動、9 月：2009 年エイズ動向報告、10 月：「できる！キャンペーン」Tokyo Pride Parade 報告、11 月：世界エイズデー前後検査情報、

(表 2 : akta 使用状況)

使用内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
ミーティング・打ち合わせ										
Rainbow Ring	10	8	10	8	7	6	6	8	3	4
Rainbow Ring 以外	17	12	17	23	20	13	9	9	7	5
非・半公開研修会・イベント										
Rainbow Ring	0	1	1	0	2	1	1	1	0	1
Rainbow Ring 以外	10	6	7	8	9	13	11	9	5	9
公開イベント・講演会										
Rainbow Ring	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0
Rainbow Ring 以外	1	1	1	1	0	1	1	2	2	3
展示	3	2	0	1	1	0	2	1	1	0
取材・見学	3	5	8	5	2	4	5	5	1	1
相談	3	6	6	8	5	4	13	2	2	1

12月：依存症の治療について、1月：第24回日本エイズ学会報告、2月：子宮頸がんワクチンについて。検査情報のコーナーでは戦略研究で連携できた検査機関を再取材し、写真付きで紹介している。

各アウトリーチ活動、イベント折り込み、店舗での発送商品への折り込み、保健所や医療機関への発送などを通じて配布している。毎月5,000部発行している。

## 2. デリヘルプロジェクト

新宿2丁目の重要な構成要因であるバーおよびクラブの顧客や従業員を対象とし、コンドームをきっかけとしてHIV/STIやセーフセックスを身近に意識してもらうことを目的に、コンドームアウトリーチをおこなっている。もともと自主的にコンドームを無料配布していた新宿2丁目の商業施設による団体「project com.」との協働事業であり、Rainbow Ringがアウトリーチボランティアおよびコンドームの作製・提供をしている。

ボランティアスタッフ「デリヘルボーイズ」(delivery health boysの略)により、毎週金曜日(第3を除く)に新宿2丁目において、コンドームと啓発資材のアウトリーチをおこなっている。

今年度作製したコンドームパッケージは12種類であった。また、今年度は12月までで30回のアウトリーチおこなわれ、1回あたり747～2424個、平均1654個、のべ51262個のコンドームを配布した。配布したボランティアは各回7～20人であった。配布店舗数は1回あたり168～173軒であった。

デリヘルボーイズは、毎月数名ずつ新人が入ってきており、また同時に活動に参加しなくなる人もいるため、比較的出入りが激しい。アウトリーチをしている際にHIV/STIや予防について、またはRainbow Ringの活動の内容について質問をされることもある。それに対しては、質問集を作るなど、情報を共有する

ような工夫をしたり、勉強会や交流会を開催して情報の伝達を図っている(デリヘル勉強会については後述)。毎回のデリヘル活動後にはコアスタッフとともにミーティングを行い、活動中における問題点を交換し、コメントを加えている。

## 3. アダルトデリヘル (Delivery Adult)

都内のハッテン場およびゲイポルノショップ(新宿2丁目を除く)に「マンスリーakta」や「LTフライヤー」、また戦略研究で作製した資材をアウトリーチした。新宿2丁目・大久保・曙橋・赤坂・六本木・新橋・八重洲・上野・秋葉原・浅草・池袋のハッテン場・ゲイポルノショップ(42～45軒)については訪問でアウトリーチをおこない、それ以外の遠方のハッテン場(14～16軒)には配送した。それぞれ、月に1回のペースで配布をおこなった。各店舗には啓発資材用のラックを設置していただいている。

今年度は戦略研究で作製した資材のアウトリーチが多く、またアウトリーチスタッフの拡充のために、戦略研究に参加している他団体のスタッフもアウトリーチに参加した。

マンスリーaktaは600～700部、「できる！キャンペーン」のパンフレットや検査情報資材は各店10部ずつ、ポスターは各店1～2枚ずつ配布した。

## 4. デリヘル勉強会

新宿2丁目でのアウトリーチ活動(デリヘルボーイズ)に参加しているボランティアスタッフを対象とした研修会を、デリヘルアウトリーチが休みの第3金曜日を実施した。

・4月16日：2009年度Rainbow Ring活動報告会と同時にコミュニティセンターaktaで開催した「デリ・フェス」の記録ビデオの上映。新宿2丁目のバーへのアウトリーチに参加しているボランティアスタッフが企画、実行したイベントの様子を觀賞し、振り返りと今後

のモチベーションアップにつなげる。(17人)

- ・5月21日：予防啓発プログラムの作り方を理解する講義。グループに分かれて『ハッテン場でアンセーファナーなセックスをする事』というテーマでリスクファクターと寄与リスクファクターを考え、それを元にハッテン場に掲載するポスターをつくってみる。まとめとして、啓発物をつくる難しさや、いつも配っている資材がどのようにして出来上がっているのか、その過程を全体でシェアする。(佐藤・張：9人)
- ・6月18日：HIV感染のメカニズムとその治療(薬、タイミング、耐性、制度、治療の流れ)、感染経路と予防について(HAVE A NICE SEXに沿って解説)。陽性者の体験をきいてリアリティを育む(感染がわかるまでー感染後の変化、HIVに感染してわかった事、学んだ事)。(佐藤・JaNP+スピーカー：11人)
- ・7月16日：性感染症の病原体と種類(Male STDs:Action Guideを参照)、性感染症別の感染経路の説明(マンスリートピックスで使用した資料を参考)、予防方法の講義。MY SAFER SEXを見つけるワーク、自分の好きな(やってみてみたい、今まで一番よかった)SEXの絵を描きチーム分けをして自分の描いたSEXを他のメンバーに演じてもらう。演じた後にその行為で考えられる危険性と予防方法も考えグループ内でシェア、全体で振り返りとシェア。(佐藤・荒木：8人)
- ・8月18日：アウトリーチを円滑に、また楽しく行うために、みんなで意見やアイデアをシェアする(木南：10人)
- ・9月17日：「Living Together」という手法についてのワークショップ。グループ内で一人3分ずつ手記の朗読と感想、グループ内での振り返りとグループごとに振り返り内容の発表、朗読で使用した冊子の説明ーLiving Togetherについての説明。ぷれいす東京について、HIV陽性者のための相談サービスーその背景と統計および2008年に実施した調査の

紹介。質疑応答、ワークの感想のシェア、まとめ。(生島：10人)

- ・10月15日：昨年度のデリヘルイベント内容の振り返りと反省、目的と対象について話し合い、イベント内容のアイデアラッシュ。

(佐藤・木南：12人)

- ・11月19日：Friend of Positive、HIV陽性者スピーカーによる経験談を聞く。質問コーナー。参加者の体験や感想などのシェア。(JaNP+スピーカー2名：8人)

- ・12月17日：TOKYO FM × Living Together「Think About AIDS」を手伝って鑑賞しよう！

- ・1月21日：今年度のデリヘルイベントについて話し合い(木南：14人)

## 5. 講演会

エイズはじめて物語：日本におけるHIVにまつわる状況や予防啓発活動の流れについて、多分野にわたる人々を講師に招いてお話を伺う。

- ・9月23日：第6回「日本ではじめてエイズを診た医師ーHIV診療の過去とこれから」(根岸昌功氏：25人)

- ・10月2日：第7回「垣根を越えるエイズ会議ーコミュニティと研究のコラボレーションの歴史」(岩本愛吉氏：18人)

- ・3月26日(予定)：(澤田貴志氏、稲葉雅紀氏、宮田一雄氏)

## 6. Living Together 計画

陽性者との共生をテーマに、NPO法人「ぷれいす東京」が2003年から始めたプロジェクトである。現在Rainbow Ringも協働で進めている。

HIVに対する意識・認識が低いことは、HIV陽性者がカミングアウトすることが困難である現状において、HIVの問題が存在することにリアリティがないことに起因していると考えられる。また予防とは、陽性者を排除することではなく、誰もが一緒に生きているから

こそ誰にでも必要なものである。陽性者やその周囲の人が綴った手記などを通して、ステレオタイプではない多様な陽性者が存在する事に気づき、HIVの問題に対して向き合うことを促すプロジェクトである。

#### 1) Living Together Lounge (音楽とリーディングの夕べ)

クラブイベント会場 (Arch)・DJ・ミュージシャン・朗読出演者とのコラボレーションで実現している(毎月第一日曜日開催)。陽性者やその周囲の人が綴った手記を、ゲイコミュニティの著名人をはじめ、HIVに関わる様々な立場・職種の人々(陽性者や支援者、医療従事者、行政担当者など)が朗読し、その手記を朗読した理由や感想について、自己の体験などをふまえながらコメントをいただく。その合間でライブミュージックやパフォーマンス、DJの選曲・アレンジした音楽を楽しむイベントである。パフォーマーからも自分自身とHIV等の関わりについてのコメントをいただいたり、朗読をしていただいたり、場の雰囲気にあった演出を心がけていただいている。毎回56~122人の参加があった。出演者が毎回変わることで、毎回初来場者を10~50人呼び込むという効果もある。

今年度の参加者数/初参加者数は、4月4日:122人/54人、5月5日:77人/34人、6月6日:72人/31人、7月4日:56人/16人、8月8日:74人/19人、9月5日:80人/23人、10月3日:118人/59人、11月7日:73人/13人、12月5日:88人/36人、1月10日:56人/25人、2月6日:72人/32人であった。

#### 2) Living Together のど自慢

Living Together Lounge がプロや人気のあるミュージシャン・アーティストの出演を楽しむイベントであるのに対して、素人がカラオケを楽しみながら、手記の朗読とそれに対するコメントを述べていくイベントである。希望があれば誰でも参加できる参加型イベントであることと、以前よりHIV啓発活動に場所

の提供等のご協力をいただいているバー「九州男」での開催という点からも、重要なプログラムである。

今年度の参加人数は5月30日(日):97人、9月26日(日):60人、1月23日(日):32人であった。また、10月16日(土)に広島、12月23日(祝・木)に鎌田にて、共催として実施に協力をした。

#### 7. 医療・検査・行政との連携と情報提供

1) マンスリーakta に、戦略研究で協力関係にある検査機関を紹介するコーナー「あんしん HIV 検査サーチ」を設けた。掲載にあたっては改めて訪問取材し、写真付きで紹介をしている。

2) 東京都の委託事業として以下の活動をおこなった。

- ・アダルトデリヘル (Delivery Adult)
- ・講演会「エイズはじめて物語」
- ・Living Together Lounge
- ・Living Together のど自慢

3) 東京都「HIV 検査ガイド」作製に協力した。これは MSM を対象とした、HIV 検査を勧める内容のパンフレットであり、多摩地域検査・相談室と南新宿検査・相談室を紹介している。

4) 新宿保健所のゲイのための検査イベントの広報(実施日:7/15 検査・22 結果、11/11 検査・18 結果)に協力した。今年度はチラシおよびポスターの作製は戦略研究の枠でおこない、配布に協力をした。受検者のうち、チラシを見て来場した人が約4割いた。

#### 8. ホームページ

<http://www.rainbowring.org/>

ホームページを改変した。主ページはおもに Rainbow Ring の活動内容や過去の活動について紹介する内容。プロジェクトごとのページで現在進行している内容を随時更新していく予定である。

## 9. 研究成果発表会（活動報告会）

11月24～26日に東京品川区プリンスホテルで開催された第24回エイズ学会学術集会の展示会場にてブース出展を行い、今までの活動を紹介するパネルの展示、作製してきた資料の展示と配布をおこなった。また akta にてコンドームのパッケージの展示と学会参加者への説明会もおこなった。

また、3月に活動報告会の開催を予定しており、主に新宿2丁目に関わる人や、Rainbow Ringの活動にご協力をいただいている方々にご参加いただいて、意見交換をしたいと考えている。

## 10. PRHYTHM

主にクラブイベントユーザーを akta に呼び込むための、DJ ユメ企画のイベントである。ゲストDJによる音楽を中心に、バザーなども併設して開催した。7月17日（土）におこなわれ、103人の来場者があった。2月26日にも開催予定である。

## 11. NPO 法人化の模索

現在のところ、法人化に向けて実際的な検討はおこなっていないが、情報を集め、情勢を見ながら計画を立てる予定である。

## D. 考察

### 1. HIV 予防啓発体制の構築と活動の継続

今年度も、予防啓発の拠点としての akta の運営、akta を中心とした「見える」「見せる」「届ける」活動、より広く効果的な活動を推進するためのネットワーキング、を継続して実施してきた。特に、MSM の多様性に配慮することや、基本となる考え方や態度(Living Together のコンセプトなど)をぶれることなく示し続けることに重点を置いてきた。また、戦略研究との関係における「インターフェイス」としての役割も継続しておこなってきた。(図1)

新宿2丁目を主な対象として設立した akta を拠点に、戦略研究を通して他の首都圏の地域やコミュニティにアプローチをする体制が構築されつつあり、今まで手の届かなかった層(hard to reach)にも活動が認知されつつある。今後もさらにネットワーキングやコミュニケーションを深め、対象層との親和性を吟味しつつ、コンセプトやメッセージを伝え続けることが必要である。

### 2. 予防啓発活動を継続するための組織

今年度は昨年度の活動を継続しつつ、その活動や体制を維持するためのスタッフの確保と育成について検討をした。

(図1)



デリヘルプロジェクトに参加するボランティアスタッフへの勉強会は、以前にも試みたことがあった。その時の主な目的は、活動に参加するにあたって必要な知識や情報の提供(Rainbow Ring や akta の活動の理念や内容の紹介、HIV/STI について、セーフターセッ

クスについて、などの講義やワークショップが中心) や、スタッフ同士の交流であった。今年度は昨年度に引き続き、上記に加えてアウトリーチ以外のプログラムに関わる機会を提供したり、他団体と交流する機会を提供した。具体的には、予防啓発プログラムの立案とその手法についての講義の後に自分たちでポスターを作ってみる、Living Together についてのワークショップ、JaNP+のスタッフとの交流会、イベントのスタッフとして関わったりイベントを企画する、などがあった。また、アウトリーチ活動の後には、コアスタッフが顔を出して話をする機会を増やすようにつとめた。

そもそもアウトリーチ活動の特徴として、コミュニティの中に出ていくことで、コミュニティの人々とのコミュニケーションがあり、コミュニティの中の様々なシーンを体験できることが挙げられる。よってデリヘルプロジェクトに参加することは、新宿2丁目コミュニティに出始めたばかりの人にとっては、コミュニティデビューの登龍門としての役割があった。しかし、単なる「配布作業ボランティア」になりがちな毎週のアウトリーチ活動に参加するモチベーション維持のためには、活動に参加することについてさらなる魅力が必要である。デリヘル勉強会では、全体の活動の中でのアウトリーチ活動の位置づけと、その重要性を示したり、その効果を示すことによって、モチベーションアップを図った。また、自ら考えて参加する機会を提供し「知的的好奇心」を刺激することによって「自己効力感」を高めたり、スタッフ同士や業界内で活躍する人々と交流することによる「コミュニケーション欲」を刺激する、などの効果もあると考えられる。HIV の問題に加え、セクシュアル・マイノリティの問題や、人と人とのコミュニケーションスキルの問題など、様々な事柄について体験をしたり考えたりする機会にもなった。この勉強会は、スタッフ育成プログ

ラムとして、今後も継続していく予定である。また、昨年度・今年度とおこなった「スタッフ・関係者インタビュー」では、活動に関わったスタッフや関係者の体験や考え、意識の変化などが語られているので、そのインタビュー内容も今後のスタッフ育成プログラムの作成に活用していく予定である。

現在コミュニティセンター事業は(財)エイズ予防財団直轄の事業として、事務局スタッフの一人が財団の職員として雇用されている。しかし、一人雇用でaktaの運営をおこなっていくことは現実的に無理であり、現在流動研究員で雇用されているスタッフ枠の今後の方針について交渉をしていく必要がある。

また、予防啓発プログラムを事業として実施していくために、母体としてのRainbow Ringを法人化することも、組織力を強固にすることにつながると思われるので、具体的な方策を検討していきたい。

## E. 結語

当研究がRainbow Ringと共に築いてきた体制や手法に一定の効果があることがわかり、コミュニティセンター「akta」を拠点としたアウトリーチにおいてアプローチが困難であったハッテン場、新宿2丁目以外の地域や、スポーツサークルなどの様々なコミュニティにもアプローチができることがわかった。ただしアプローチを継続するためには、ボランティアスタッフが継続して活動を続けられる環境や、スタッフ育成プログラムが必要である。今後はスタッフ育成プログラムのマニュアル化に加え、Rainbow Ringの法人化も考慮して体制を作っていくたい。

## F. 発表論文等

なし

## 名古屋地域における男性同性間の HIV 感染予防介入研究

研究分担者：内海 眞（独立行政法人国立病院機構東名古屋病院）  
研究協力者：藤浦裕二、石田敏彦（ANGEL LIFE NAGOYA）、杉江修二（中京大学）、  
亀田 研（名古屋大学）

### 研究要旨

本年の研究課題として、次の3点を掲げた。1) 新規 HIV 陽性者中の AIDS 患者割合の地域差の背景にある要因の検討、2) Group Investigation (GI) のモデルによるエイズ教育の効果、3) ALN の活動実績と今後の課題。

1) 愛知県の新規 HIV 陽性者の中の AIDS 患者の占める割合 (32%) は、東京 (25%) や大阪 (23%) に比べて高い。この背景因子について、すでに報告されているデータに基づいて検討した。その結果、保健所における検査時間数と受検者数や MSM の受検率には差がなく、保健所以外で実施されている夜間休日の検査実施時間に 8~9 倍の差があることが判明した。

2) GI モデルでの共同学習を実践し、大学生の HIV/AIDS に関する知識や関心、態度の変容の有無を検討した。その結果、知識や関心、態度といった認知面では積極的な方向への変化が見られたが、「感染不安」や「コンドーム使用」などの感情面や行動面に関しては有意な変化は認められなかった。

3) 活動内容は、①コンドーム及び啓発資材の商業施設への配布、②コミュニティスペース「rise」の運営、③予防啓発イベント「NLGR」と無料 HIV 検査の実施（6月）、④無料 HIV 検査「M 検」の実施（12月）、⑤ゲイバー利用者を対象とした、ALN の活動評価と性行動に関するアンケート調査の実施、の5点である。

①名古屋市の女子大小路、伏見、名駅周辺の商業施設計 69 店舗のうち、46 店舗にコンドーム、コミュニティペーパー、HIV 陽性者の声を掲載した「Voice of Friends」を配布した。コンドームはバーなどには一軒 20 個/月、ハッテン施設には 500 個/月を配布した。

②従来通り、週 4 日オープンした。月平均 143 名の来訪者があった。

③6 月の NLGR の検査会には 189 名の受検者があった。陽性と診断された人は 6 名 (3.2%) であった。次回からの NLGR は ALN 単独ではなく、NLGR に賛同する NGO および商業施設の関係者や個人が協働して企画運営することになった。

④M 検には 33 名の来場者があった。HIV 陽性者は 0 人であった。

⑤アンケート調査に協力してくれたバーは 32 店舗で、調査用紙配布数は 880 部である。調査結果は別の研究者によって発表される。

### A. 研究目的

わが国の HIV 感染状況は改善の傾向を示していない。速報値ではあるが、厚生労働省のエイズ動向委員会の報告によれば 2010 年の新

規 HIV 陽性者数は過去 2 位の 1,503 人であり、このうちエイズ患者数は 453 名で過去最高を記録している。さらに、保健所等における HIV 検査件数と相談件数も大幅に減少している。

決して望まれる方向に進んでいるとは言えない。その意味で、我々の研究と予防対策の立案・実践にはさらなる深化と拡充が求められている。

今年度の研究課題は、1) 新規 HIV 陽性者中のエイズ患者割合の地域差の背景にある要因の検討、2) Group Investigation (GI) のモデルによるエイズ教育の効果、3) Angel Life Nagoya (ALN) による MSM を対象にした予防啓発活動、の3点である。

新規 HIV 陽性者の割合は東京、大阪で低く、愛知、宮城で高い。1) の研究では、この差をもたらす背景因子を探ることを目的とした。

2) の研究は、アクティブラーニングを促す共同学習の授業モデル (GI) を導入し、教師を目指す大学生を対象に HIV/AIDS に関する知識の習得と態度の変容を図った実践的研究である。

3) ALN の予防啓発活動はこれまでの活動の継続であった。本報告では、活動内容と成果を示すとともに、現在の予防対策上の問題点を明確にし、次年度の研究への橋渡しとしたい。

## B. 研究方法

新規 HIV 陽性者中の AIDS 患者割合の地域差の背景因子の検討では、厚生労働省のエイズ動向委員会の報告、全国 HIV/エイズ検査・相談窓口情報サイト、および日高氏による「ゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 感染予防行動と心理・社会的要因に関する研究」と「インターネット利用層への行動科学的 HIV 予防介入とモニタリングに関する研究」の研究報告書のデータをもとに、宮城、東京、愛知、大阪の各地域における新規 HIV 陽性者のなかのエイズ患者の割合と、各地域の保健所等における人口 10 万人当たりの受検者数や、夜間休日検査時間数との関係を検討した。

GI モデルによるエイズ教育は、まず教師が

課題をクラス全体に提示し、その後「I クラス全体でサブテーマを決め、これに対応する研究小グループを編成する」「II 小グループで探求計画を立てる」「III 探究活動を実行する」「IV 小グループで自分たちの発表を計画する」「V グループで発表する」「VI 教師と学生が個人レベル、グループレベルで GI を評価する」という 6 段階を進み、12~15 時間でひとつのテーマの学習を終える。学習の前後に質問紙による「HIV/エイズに関する意識調査」(厚生労働省、NTT レゾナント、三菱総合研究所 2005) を行い、HIV/エイズに関する認知面や行動面の変化を調査した。また、学習終了後、自分の考えの変化に関するレポートを書かせ、その内容を分析した。

ALN の平成 22 年度の活動は以下の通りである。①名古屋を中心としたゲイコミュニティに対するアウトリーチ[コンドームおよびフリーペーパー h. a. n. a. ]。②コミュニティスペース「rise」の運営とイベントの開催。③予防啓発イベント「NLGR」および無料 HIV 検査の実施 (6 月)。④MSM を対象とした保健所での無料 HIV 検査「M 検」の実施 (12 月)。⑤ALN の活動評価、の 5 つである。

## C. 研究結果

1) 新規 HIV 陽性者中のエイズ患者の割合は、宮城、東京、愛知、大阪の各都道府県で 37.2%、24.8%、32.0%、23.2%となる (表 1: 2009 年までの累計、エイズ動向委員会)。

表1 新規HIV陽性者におけるAIDS患者割合の地域差(2009年までの累計)

	HIV感染者数	AIDS患者数	総数
宮城県	81(62.8%)	48(37.2%)	129
東京都	4447(75.2%)	1467(24.8%)	5914
愛知県	626(68.0%)	295(32.0%)	921
大阪府	1303(76.8%)	393(23.2%)	1696

この差の原因としてまず想定されるのは、各地域における HIV 検査の受検率に差があることである。そこで、各地域における保健所の受検者数を 2007 年から 2009 年までの 3 年間で調査した（エイズ動向委員会）。3 年間の平均値を出し、2009 年の人口から人口 10 万人当たりの受検者数を計算したところ、宮城、東京、愛知、大阪の各地域の数値は、61.6、114.7、142.4、143.8、となった（表 2）。宮城と他地域との差はあったが、愛知と東京、大阪の間には差がなかった。日高氏による MSM を対象にしたインターネット調査（REACH Online）でも、上記と同様の結果が示されていた（表 3）。

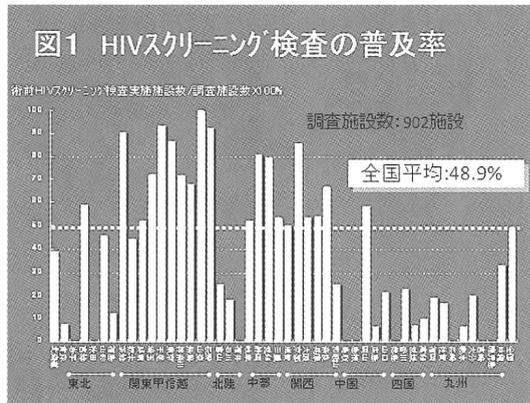
次いで、保健所以外の HIV 検査の受検率に差があるかどうかを検討した。まず、医療施設における HIV スクリーニング検査の普及率の差を検討した。図 1 に示すように、普及率

表2 保健所における平均受検者数  
[人口10万対]

	2007年	2008年	2009年	平均	人口 2009年	平均受検 者数 (対10万)
宮城県	1146	1507	1672	1442	234万	61.6
東京都	14319	15921	14444	14895	1299万	114.7
愛知県	10295	11521	9836	10550	741万	142.4
大阪府	11464	13862	11716	12716	884万	143.8

表3 HIV抗体検査受検割合(地域別)  
REACH Online 2007. 日高

	回答数	過去1年間	これまで
北海道・東北	479	76(15.9%)	137(28.6%)
東京都	1468	399(27.2%)	765(52.1%)
愛知県	343	102(29.7%)	174(50.7%)
大阪府	592	147(24.8%)	286(48.3%)



は東京、愛知が高く、宮城、大阪は相対的には低かった。

次に全国 HIV/エイズ検査・相談窓口情報サイトに掲載された各地域の保健所と常設検査施設（クリニックを含む）における 4 週間分の HIV 検査実施時間を調査した。結果は表 4 に示す如く、保健所における人口 10 万人当たりの検査時間は、愛知、大阪、東京、宮城の順に高かったが、保健所以外の常設検査施設

表4 HIV/エイズ検査・相談窓口情報サイトに掲載された各地域の保健所およびそれ以外の施設における4週間分のHIV検査実施時間  
( )内は人口10万対

	保健所	保健所以外
宮城県	24時間(1.03)	0時間
東京都	210.25時間(1.62)	740時間(5.70)
愛知県	198.5時間(2.68)	75時間(1.01)
大阪府	171時間(1.93)	479.25時間(5.42)

の人口 10 万人当たりの検査時間は、東京、大阪は愛知の 5 倍以上の時間であった。さらに、休日夜間の HIV 検査実施時間は愛知と東京、大阪との間には大きな差が存在していた（表 5）。日高氏の調査結果（REACH Online 2008）も同様の結果を示しており（表 6）、東京、大阪の MSM の人々は保健所以外の常設検査施設を利用する割合が高かった（東京：78.9%、愛知：29.5%、大阪：75.0%）。

表5 HIV/エイズ検査・相談窓口情報サイトに掲載された各地域の保健所及びそれ以外の施設における4週間分の休日夜間検査実施時間  
( )は人口10万対

	保健所	保健所以外	合計
宮城県	8時間(0.34)	0時間	8時間(0.34)
東京都	82.5時間(0.64)	430時間(3.31)	512.5時間(3.95)
愛知県	18.5時間(0.25)	27時間(0.36)	45.5時間(0.61)
大阪府	0時間	254時間(2.87)	254時間(2.87)

2) Group Investigation のモデルによるエイズ教育の効果については、質問紙による学習前後の比較と、学生によるレポートによって判定した。質問紙の結果は、プレとポストで対応のない t 検定を行った。「HIV とエイズに関する知識」、「関心」、「差別的でない態度」に有意な差がみられた。片側検定的な仮説として「授業後 (ポスト)

表6 HIV検査受検者の検査場所  
REACH Online 2008. 日高

	回答数	保健所 (平日昼)	保健所 (夜間 休日)	病院・医 院・施設 検査所	イベント	その他
東北・ 北海道	142	72 (50.7%)	46 (32.4%)	49 (34.5%)	6 (4.2%)	45 (31.5%)
東京都	720	209 (29.0%)	109 (15.2%)	568 (78.9%)	30 (4.2%)	79 (11.0%)
愛知県	149	64 (43.0%)	30 (20.1%)	44 (29.5%)	46 (30.9%)	39 (26.1%)
大阪府	283	120 (42.4%)	27 (9.5%)	212 (75.0%)	31 (11.0%)	26 (9.3%)

の方が授業前 (プレ) よりも知識面、感情

面、行動面の得点が高い」という側面を検討すると、知識に関しては、ポストの方がプレよりも得点が有意に高いことが示された。つまり、今回のモデルによる授業により、エイズに関する各知識や関心、態度といった認知面には積極的な方向の変化が見られた(表7)。

しかし、「HIV に感染する不安」や「コンドームの使用」に関しては積極的な方向への有意な変化がみられなかった。これは、感情面に関する側面や行動面に関する側面についての質問紙の点数に関して、有意な上昇が見られなかったということを示している。

レポートの内容分析では、「学習前の自身の知識の乏しさ(23名)、自身の関心の低さ(17名)」に多くの者が言及し、学習を通して「感染経路に関する誤解(2名)、コンドーム使用の意義(2名)、HIV とエイズの違い(3名)、噂の間違い(1名)、感染者・患者への偏見(5名)、汚いというイメージ(1名)、HIV の感染力やエイズの症状(4名)、母子感染の理解(4名)問題の重大さ(1名)」といった諸点での誤解の解消ができたと書いている。

この課題の問題性への認識については、「自分自身がこの問題に関する理解を深める必要性の表明(3名)」「理解を外に広げる必要性の表明(9名)」「性教育の改善必要性の表明(6名)」「自身として継続的にこの問題につい

表7 プレポストでの各得点の平均値の差異

質問項目	プレ	ポスト	t 値	有意水準	
HIV とエイズの違いの知識	2.63	0.83	3.85	0.36	8.49 **
HIV とエイズへの関心	2.49	0.75	3.20	0.53	4.84 **
知識 1 HIV感染とエイズの差異	1.66	0.69	2.91	0.37	10.02 **
知識 2 10年くらい自覚症状がない	2.27	0.71	2.80	0.41	4.09 **
知識 3 早期発見であれば遅らせる治療法がある	2.03	0.80	2.74	0.56	4.54 **
知識 4 日本でHIV感染者が増加	2.54	0.71	2.97	0.17	3.79 **
知識 5 性感染症になるとHIVに感染しやすい	1.49	0.78	2.26	0.74	4.39 **
知識 6 HIVの感染は専門の検査が必要	2.02	0.85	2.66	0.59	3.81 **
知識 7 抗体が検出されない期間がある	1.90	0.92	2.49	0.70	3.14 **
あなた自身が今後HIVに感染する不安があるか	2.41	0.84	2.54	1.04	0.60 n.s.
性交渉の際、コンドームを使用しているか	3.35	0.80	3.48	0.75	0.64 n.s.
HIV感染者に偏見や差別があってはならない	3.15	0.86	3.74	0.44	3.81 **
この一年にマスメディアからHIVに関する情報を得た	1.88	0.68	2.51	0.74	3.80 **

\*\* p<.01

て、どう対応するかも含めて考え続けていきたい（8名）」「重大な問題としての危機感の必要性（2名）」「患者の人権を尊重する必要性（1名）」「政策的な対応の必要性（3名）」といった記述が見られた。

行動面にかかわる記述は、「学んだことを伝えたい（4名）」「感染者・患者の手助けをしたい（3名）」「できることがあったら実行したい（1名）」「予防に努める（1名）」などがあったが、その記述量は多いものではなかった。

### 3) - ① ゲイコミュニティへのアウトリーチ

名古屋地区のMSM向け商業施設は栄4丁目の女子大小路、栄1丁目の伏見、名駅南から納屋橋近辺の3地域に集中している。2011年1月現在、それぞれの地域においてALNとの協力関係にある商業施設は表8の通りである。

女子大小路地区は、客の年齢層が20代から40代を中心としたバーが集まっており、そのほとんどはALNと協力関係を結んでいると考えられる。

女子大小路地区で連携が取れていないバー2店は観光バーである。他に協力体制にあるセクシャルマイノリティのバーが3店あり、ピアンバー2店、女装バー1店である。これらの

バーに対してコンドーム配布は行っていないが、ポスターや陽性者のメッセージの冊子「Voice of Friends」、検査会の案内などの啓発資材は配布している。

協力体制にあるゲイショップでは、特に啓発資材の配布において多大なる協力をいただいている。昨年度に他地区から移転してきた店舗と合わせて、マンションタイプのハッテン施設が2軒あるが、現在もまだ連携が取れていない。

協力体制にある外国人向けのクラブイベントでは、コンドームの配布やイベント内での検査会の告知などを行っている。主な客層が、英語圏とポルトガル語圏からなっている。ただし、「M検2010」では外国語対応ができなかったため、ポスターの配布および掲示を依頼しなかった。

伏見地区および名駅地区では、客の年齢層が高いバーが集まっているが、協力体制にあったバーが1店舗閉店したため、協力率が減少した。昨年度も2店舗が閉店しており、年々協力率が減少している。今年度中にもう1店舗閉店予定である。また、名古屋駅西側にある客の年齢層がかなり高いバーへも昨年度から交渉を始めているが、閉鎖的環境（トイレ

表8

	施設	
女子大小路	バー	30/36店 協力率 83%
	ショップ	1/4店 協力率 25%
	ハッテン施設	0/2店 協力率 0%
	クラブイベント	5/5件 協力率 100%
伏見	バー	1/9店 協力率 11%
名駅近辺	バー	3/10店 協力率 30%
	ハッテン施設	2/3店 協力率 67%

が他店舗と共同、結婚されている方が多く、啓発資材を持ち帰ることができない等)から、アウトリーチの協力までには至っていない。また、連携が取れていないハッテン施設は高齢者の客層をターゲットしているため、この施設との連携が、中高年齢層への啓発において重要な可能性を持っている。

名古屋地域では団体設立当初から継続して Condominium アウトリーチを行っている。設置に理解をいただけるゲイバーやハッテン施設へコミュニティペーパーと共に月に一度配布を行っている。各店舗に固定数を配布し、翌月にはクライアントが持帰った数を補充している。ゲイバーには一軒当たり20個、ハッテン施設には一軒当たり500個を2軒に配

布している。配布作業は特定のスタッフが継続して行い、Condominium の配布が店舗オーナーとのコミュニケーションの機会を生み、協力体制の構築に貢献している。

図2に配布した Condominium のデザインを、また表9において協力店舗(ゲイバー)での Condominium 消費量を示す。表に示されたように Condominium 消費量はここ数年変化しないが、カウンターに置いていた啓発資材をトイレに移動させて Condominium と並べることで目立つようにしてくれた店舗もあれば、イベントフライヤーと一緒に取りやすく並べてくれた店舗もある。このような工夫をしてくれている店舗は、比較的客の年齢層が低いバーに多い。

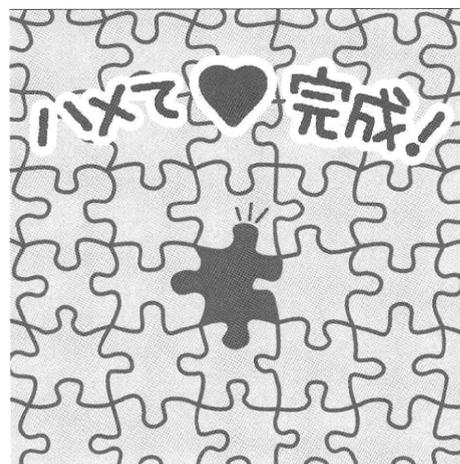


図2. 無料 Condominium のパッケージ

表9 最近3年のコンドームアウトリーチ（消費量）

	19年度	20年度	21年度	22年度
4月	489	507	487	532
5月	416	465	593	510
8月	446	478	444	434
9月	429	462	505	460
10月	475	460	422	385
11月	438	453	470	484
12月	385	430	423	434
年度合計	3078	3255	3344	3239



図3. 陽性者メッセージ冊子「Voice of Friends」

また今年度はNLGR2009 およびNLGR2010での展示のために、名古屋医療センターのHIV陽性者の方からいただいた手記を冊子に製本した。これまでアウトリーチでは、東京など他地域で発行された陽性者メッセージの啓発資材を配布していたが、「他地域では身近に感じない」「どこか他人事のように感じる」などの読んだ方の声もあり、NLGRに来場されなかったクライアントにもメッセージが届くように冊子「Voice of Friends」を10月に発行した。既に、協力店にあるゲイバーおよびショップとハッテン場に配布するだけではなく、愛知県と名古屋市の保健所業務担当部署に依頼して、HIV検査を行っている保健所にも配布をお願いした。また、12月に開催した「M検2011」でも、受検者に配布している。図3に冊子の

表紙と陽性者支援団体 LIFE 東海の紹介ページを示す。

さらに、昨年度愛知県下で行政が主催する検査会の案内パンフレットを作製したが、実施日時の変更に伴い、更新を行った（図4）。

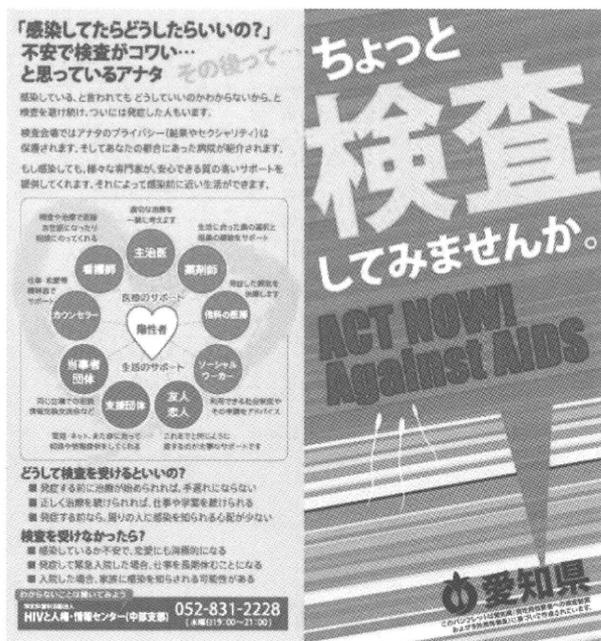


図4. 愛知県内検査会の案内マップ

### 3) ② rise の運営

コミュニティスペース riseは名古屋市中区栄女子大小路地区の同性愛者を対象とした商業施設を利用するMSMが、気軽に立ち寄ることのできる施設（ドロップインセンター）として、また、名古屋市栄女子大小路地区に集まるMSMへのHIVを含む性感染症に関する相談、予防知識・関連資料の提供とその取得の補助、性行為における予防に向けた意識改革と行動変容の支援拠点として設立された。2004年8月1日にオープンした(当時はNagoya Nagoyaka Navigation、略称3Nと呼ばれた。2006年5月に現在の場所に移転) riseの運営・管理を行い、ゲイコミュニティが受け入れやすい予防啓発内容を検討し、結果としてHIV/STI感染の拡大防止を図ることである。

以下に運営方式を述べる。

1. ドロップインセンター、コンドームアウトリーチの拠点、ALNおよびNagoya Lesbian & Gay Revolution[略称NLGR]準備のための会議室および作業場、毎月第三土曜日開催の予防勉強会を運営している。勉強会は「JOINT 大人の保健室」と称した座談会形

式であり、情報共有を主とした「共に考える」スタイルである。

2. 運営方法：運営はALNが担当し、コミュニティセンターとしての開場は木曜日・金曜日 20:00～23:00、土曜日 16:00～22:00、日曜日 14:00～20:00の時間帯である。専従スタッフはおかず、事前にシフトを組んでALNのボランティアスタッフが担当する。スタッフは1～2名とし、担当スタッフで来場者への対応が困難な場合には他のスタッフへ電話連絡にてつなぐ。

その他の開催イベントとしては、手話教室 毎月第1土曜日 19:30～21:00 および第2・第4日曜日 15:30～18:30、僕らのゲイライフプロジェクト 毎月第2土曜日 16:00～22:00、ソーシャルスキルトレーニング 毎月第4土曜日 18:00～19:30 中国語 毎月第2土曜日 19:40～21:30であった。表10に平成22年度にriseにて開催されたイベントの一覧を示す。各イベントの最後には参加者に対して、検査会などの広報や啓発資料の紹介を行なっている。

ここ数年、来場者数に大きな変化はないが(表11)、毎年6月には減少し、7月に増加している。これは6月に予防啓発および無料検査会イベントNLGRを開催しているが、常連の来場者がこのイベントに参加するため、その準備に追われて6月は減少し、NLGRでの宣伝効果によって7月の来場者数が増加する傾向にある。

初来場者へのアンケート調査によれば、来場の主な理由は、HIV・STI関連の情報収集が18名(29%)、相談が2名(3%)、情報に触れて興味喚起が8名(13%)、riseで開催されるイベントへの参加が20名(32%)、暇つぶしが10名(16%)となっている。来場のきっかけは友人の誘いが最も多くて21名(33%)、次いでコミュニティでのパンフレットや口コミが16名(25%)、ネット(WEBサイトやSNS)

表 10 平成 22 年度の rise におけるイベント

イベント	頻度	
	JOINT 大人の保健室（勉強会）	月 1 回
ソーシャルスキルトレーニング（コミュニケーション）	月 1 回	毎月第 4 土曜日
手話教室	月 3 回	毎月第 1 土曜日 第 2・4 日曜日
中国語教室	月 1 回	毎月 2 土曜日
僕らのゲイライフプロジェクト（ワークショップ）	月 1 回	毎月 2 土曜日

表 11 最近 3 年の rise の来場者数

	20 年度	21 年度	22 年度
4 月	120	177	123
5 月	112	182	170
6 月	106	83	107
7 月	143	165	166
8 月	73	166	131
9 月	162	217	132
10 月	187	117	134
11 月	184	182	151
12 月	160	134	177
年度合計	1247	1423	1291
月平均	139	158	143

表 12 最近 3 年の rise の初来場者数

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
平成 20 年度	1	2	14	1	3	8	2	6	9	55
平成 21 年度	9	10	10	7	7	4	3	5	1	56
平成 22 年度	2	2	12	9	13	8	8	6	4	63

が 11 名 (17%)、イベントの案内が 11 名 (17%) となっており、来場者の連鎖やコミュニティでの情報に触れたきっかけが多くなっている。最近 3 年の初来場者数を表 12 に示す。

3) -③ 予防啓発イベント「NLGR」および無料 HIV 検査の実施

Nagoya Lesbian & Gay Revolution (略称 NLGR) はこれまで無料 HIV 検査会と予防啓発イベントを同時開催するイベントであり、NLGR2010 においては同じ形式で実施した。延べ来場者数は例年通り 3000 人を超えた。しかし、検査会場を千種保健所に移行したことで